超次元調査隊トライフォース軍

クドウゼンキ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはまだ自分の運命を知らぬ一人の男の壮絶なる旅の記録である。

目次

第1話 ―― 1
第2話 ―― 7
第3話 獣の目覚め ―― 12

第1話

クドウゼンキ：♂
クドウセイギ：♂
マリア・トラベリア：♀
ナレーション：♂ｏｒ♀

エピソード1「始まり」
これはまだ自分の運命を知らぬ一人の男の壮絶なる旅の記録である。
ゼンキＭ「俺の名はクドウゼンキ、いたって普通の男子・・・のはずだった、そう、
あの出来事があるまでは・・・。
それはある晴れた日のことだった、いつものように、クラスメートであ
り幼馴染のマリア・トラベリアと共に学校のテストを終え、自宅に帰宅
しているときだった。
その時自分に降りかかる悲劇など知るよしもなかった。」
ゼンキ「いや～、今日のテストはまた一段と難しかったな～。」
ゼンキが独り言を言うと、マリアが突っ込む。
マリア・トラベリアはゼンキの幼馴染であり、彼らが通ってるスクールが公認して
いるガールフレンドである。
マリア「何言ってんのよ、またなんだかんだでスクールＮｏ．１取ったくせに。」
ゼンキ「マリアだってＮｏ．２じゃないか、お互い様だろ。」
いつものように何気ない会話を繰り返しているときに、ゼンキの運命を変える連絡
が入った。
ｐｒｒｒ・・・

ゼンキ「ん？あ、父さんから通話だ、もしもし、父さん、どうしたの？」
ゼンキの父親の名はクドウセイギ、あらゆる部門での科学力に長けている科学界の
権威であるが、本人はそんなのは気にせず自前の気さくな性格を周囲に振舞ってい
る。
その性格のせいか、彼を慕う部下は非常に多い。
争いは好まない性格だが、自分に親しいものが相手の意図的な理由で傷ついてた場
合は容赦なく相手を追い詰める裏の人格を持つが、裏人格が出ることは非常に稀で
ある。
自前で研究所を持っている。
セイギ「ああゼンキか、悪いが今すぐ研究所に来てくれないか、見せたいものがあ
るんだ。」
ゼンキ「ああ、わかったよ、父さん、すぐ戻るよ。」
マリア「どうしたの？何か用事？」
ゼンキ「いや、今父さんが研究してるものがあるんだけど、それは今までに無い新
しい研究なんだそうだ、今俺たちがスクールで習っているのよりももっと
すごい研究らしい。」
マリア「へえ～、ねえ、私もついて行っていいかな？」
ゼンキ「え？ん～多分大丈夫だと思うけど。」
マリア「じゃあ決まりね」
こうしてゼンキとマリアはセイギの待つ光研究所に行くことになった。
～光研究所入り口～
セイギ「ああ、ゼンキ来たか、マリアちゃんもいらっしゃい。」

ゼンキ「父さん、マリアもついていきたいって言うんだけど、いいかな？」
セイギ「もちろん大歓迎さ。」
マリア「ありがとうございます。」
セイギ「さあ、こっちだよ。」
セイギについて行き、研究所の最深部に到着した、過去にここに来たことのあるゼ
ンキはある違和感を覚えた。
ゼンキ「父さん、ここって前は何も無いだだっ広い空間が広がってるところだった
よね？」
セイギ「ああ、そうだよ、でも今は違う。」
ゼンキ「やっぱりか・・・、この大きいのは何なの？」
セイギ「それを見せるために俺はお前を呼んだんだよ、ちょっとまってろよ。」
そういうとセイギは隣にあるパネルを操作し始めた。
セイギ「俺が見せたかったのはこいつだ。」
そういうと、今まで暗かった部屋に明かりが灯された。
ゼンキ「父さん、これは・・・。」
マリア「大きい、鉄の艦？」
マリアの言う通り、その空間にはとてつもなく巨大な一隻の艦（ふね）があった。
そしてセイギはその艦の名をつぶやいた。
セイギ「こいつは俺の今研究してる謎の永久機関、通称「Ｒドライヴ」を搭載した艦
正式名称は「ＤＴＳ―００１時空航行艦プロメテウス」だ。」
ゼンキ「プロメテウス・・・？」
ゼンキはその名に聞き覚えがあった。
ゼンキ「その名前って・・・。」
セイギ「そうだ、お前にやらせていた戦闘シュミレーションでお前が自作し、名付

けた戦艦の名だ。」
マリア「ちなみ、型式番号のＤＴＳはどういう意味で？」
セイギ「Ｄ：ディメンション（時空）Ｔ：トラベル（旅）Ｓ：シップ（艦）だ。」
ゼンキ「すごいや父さん。」
セイギ「ゼンキ、お前にはもうひとつ、見せたいものがある。」
ゼンキ「もうひとつ？」
そう言うとセイギはゼンキをつれてさらに奥へ行った。
ゼンキ「父さん、俺に見せたいもう一つの物って？」
セイギ「これさ。」
セイギの言葉と共に照らされたそれは、鉄灰色の体、背中に十枚の翼を持った鋼鉄の
巨人だった。
ゼンキ「こ、これは。」
セイギ「まだ試作段階だがな、データが集まれば完成となるこの機体は・・・。」
セイギよりも早くゼンキがその名を呼ぶ、正しくはその物の完成した名前を。
ゼンキ「ハイパーフリーダム・・・。」
セイギ「正しくは試作段階だから「ＺＦＭＧ―ＧＮＸ００１Ｐ　プロトハイパーフリーダム」だ、
お前が考えた、最高のスピードを持つ最強の機体だ」
ゼンキ「父さんにはかなわないな・・・。」
セイギ「こいつにはさっきのプロメテウスと同じＲドライヴを三基搭載してある、同調
率がまだ安定しないから、データがいろいろと必要だ。」
そしてな・・・とセイギは言葉を紡ぎ。
セイギ「プロメテウスとこいつには、Ｒドライブ以外にもう一つ、ある機関を組み込ん
である。」
ゼンキ「ある機関？」

セイギ「自立学習型進化システムさ。」
ゼンキ「じゃあ、こいつとプロメテウスは・・・。」
セイギ「ああ、こいつらは学習し、進化することができる。」
話し終え、二人はプロメテウスの格納庫まで戻ってきた。
セイギ「今からプロメテウスの試験運行と、プロトハイパーフリーダムの稼動実験を行う。」
ゼンキ「わかった。」
～プロメテウス艦橋～
ゼンキ「ここがプロメテウスのブリッジか。」
マリア「あ、ゼンキ遅いよ～。」
ゼンキ「マリア、下にいないと思ったら、ここで何してるんだ？」
マリア「プロメテウスのＣＩＣを練習してたのよ。」
ゼンキ「お前がＣＩＣなら、安心できるな。」
セイギ「よ～し、ならプロメテウスのシステムを立ち上げるぞ。」
ゼンキ／マリア「わかったよ／わかりました」
そう言い、三人はプロメテウスの稼動シークエンスを始めた
ゼンキ「プロメテウス稼動シークエンス開始、艦システムオールグリーン。」
マリア「Ｒドライブ、問題なく稼動、動力部の感度良好。」
セイギ「ハイセンサー、及び、ペレクトディスフェンサー、アイドリング正常。」
マリア「プロメテウス全システムオンライン、発進準備完了。」
ゼンキ「機体の搬入は？」
マリア「確認済みです。」
ゼンキ「船体固定アームパージ。」
セイギ「船体浮力システム異常なし。」
ゼンキ「これより発進、ならびに次元転移システムの稼動実験を行う。」
マリア「了解、次元干渉システム起動。」
セイギ「転移先に仮想空間を形成、目標地点に設定。」
マリア「次元ホール、開きます。」

目の前の空間に穴が開く、今にも吸い込まれそうな気分になりそうな光景だった。

ゼンキ「前進微速、プロメテウス発進！」

プロメテウスが前進し、空間に開いた穴に吸い込まれるように消えた。

第一話　完

第2話

クドウゼンキ：♂
クドウセイギ：♂
マリア・トラベリア：♀
ナレーション：♂or♀

エピソード2「目覚め」
プロメテウスで時空跳躍を果たしたゼンキ達は、転移先でプロトハイパーフリーダムの起動実験並びに試験運用を行うことにした。
マリア「空間転移完了、艦内、艦体共に異常なし。」
セイギ「Rドライヴ問題なく稼動、時空転移無事に完了だ。」
ゼンキ「よし、まずは初期段階完了ってとこかな。」
セイギ「では、続いてプロトハイパーフリーダムの稼動実験、並びに試験運用を行うぞ！」
ゼンキ「了解、じゃあ俺は格納庫に行って機体を立ち上げておくよ。」
そう言ってゼンキはブリッジを出て格納庫へと向かった。
～　プロメテウス　格納庫　～
ゼンキが到着すると、そこにはパイロットを今か今かと待っているような鋼鉄の巨
人が待っていた。
ゼンキ「しっかし～、見れば見るほどよく出来てるな～、まあ、アレを再現して作
ったらしいからな、当然といえば当然か。」
そう言ってゼンキは装置に乗って機体の腹部、コックピットに乗り込んだ。
ゼンキ「ここがこいつのコックピットか・・・、いい感じだな、よし、立ち上げる

か。」
そう言うとゼンキは、気持ちを切り替え、機体の立ち上げ作業に入った。
ゼンキ「ＣＰＣ設定完了。ニューラルリンケージ。イオン濃度正常。メタ運動野パラメ
ータ更新。Ｒドライヴ臨界。パワーフロー正常。全システムオールグリーン。
ハイパーフリーダム、システム起動。」
すべての起動を終えると、巨人の目に黄色い光がともった。そのころ艦橋（ブリッジ）では・・・。
～ プロメテウス　艦橋　～
セイギ「じゃあ、こっちも機体の発進シーケンスを開始するぞ、コンディションを
レッドで発令。」
マリア「了解、コンディションレッド発令、対機動兵器戦闘用意、パイロットは機
動兵器にて待機してください。」
同時期に格納庫でも発進シーケンスが開始されていた。
ゼンキ「もう待機してるんだがなってな、こんな事言ってたら後でどやされるな。」
そして機体が移動し始めた。
マリア「艦首（かんしゅ）モジュールをカタパルトに設定、ブリッジを戦闘形態へ移行。」
マリアの言葉と共にプロメテウスの艦首が動き出した、艦首の内部が回転し、次に奥が見え
たときには、射出されるのを今か今かと待っている巨人の姿があった。
マリア「発進準備完了、射出タイミングを、パイロットに譲渡（じょうと）します。」
ゼンキ「了解　Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ（アイハブコントロール）クドウゼンキ、プロトハイパーフリーダム、行くぞ！」

その言葉と共に、機体が射出された、前からの重力に一瞬ゼンキがうめく。
ゼンキ「ぐっ!?流石にすごいGだ、だが！」
次の瞬間、ゼンキは機体を自分の手足のように操っていた。
ゼンキ「さてと、それじゃあこの機体の真の姿を見せるとするか。」
そう言ってゼンキはひとつのボタンを押し込んだ、その瞬間に機体が色づき始めた。
胸部は大空のように蒼（あお）く
頭部手足は白鳥の羽のように白く
背に背負う翼は木々のようにエメラルドグリーンに
碧翼（りょくよく）の翼を持つ巨人は空を自由自在に飛び回った。
セイギ「あれがプロトハイパーフリーダムの真の姿、機体の装甲にRドライヴから抽出された
粒子、俺たちは「光粒子」と名づけたが、それを浸透させて、あらゆる衝撃から機体
を守る。」
マリア「なんて綺麗な・・・。」
マリアの言葉どうり、機体の翼と放出される粒子によって、機体は幻想的な動きを見せ、見る
ものを魅了する動きだった。
セイギ「ゼンキ、乗り心地はどうだ？」
ゼンキ「ああ、最高だよ、さすがは父さんが作った機体だよ。」
セイギ「何言ってんだよ、それを組んだのはお前だろ？」
ゼンキ「そうだったね。」
セイギ「実践演習を開始するぞ、今から擬似ターゲットを射出するからそれを撃墜してみろ。」
ゼンキ「了解！」
次の瞬間に、プロメテウスから小型の機体が射出された、これが擬似ターゲットの「ドラグーン」である。
ゼンキ「あれか、よし！」
ゼンキは機体を走らせ、機体の腰にある実体剣「ガーベラブレード」

を横一線、ドラグーンが真っ二つに裂けて爆散した。
ゼンキ「すごい切れ味だ、これがガーベラブレード。」
セイギ「なかなかだろ？光粒子を刀身にまとわせて切れ味を上げてるんだぜ？」
マリア「すごいんですね！光粒子って、でもそれを使いこなすゼンキもすごいよ！」
セイギ「そうだな。」
それからゼンキ達はあらゆるパターンの実践演習を終えて、最後にある武装の試用をすることにした。
～　プロメテウス　艦橋　～
ゼンキ／マリア「ネオマキシマ砲？」
セイギ「そう、このプロメテウスの最強武装だ、なにせＲドライヴから直（じか）にエネルギーを取り出して、相手にたたきつけるんだからな。」
ゼンキ「Ｒドライヴから直にって、確かにそれならかなりの出力になるね。」
セイギ「じゃあ、発射シーケンスを開始するぞ！」
マリア／ゼンキ「了解！」
セイギ「ネオマキシマ砲、発射スタンバイ、艦首モジュールを砲身に移行。」
マリア「Ｒドライヴをネオマキシマ砲用出力機関に接続、抽出開始。」
セイギ「総員、ネオマキシマ砲による対閃光用ゴーグルを着用。」
マリア「エネルギー充填、８０％」
セイギ「発射用トリガーを艦長席に配置、ゼンキ、トリガーはお前が引くんだ。」
ゼンキ「了解。」
マリア「エネルギー充填、１００％」
ゼンキがトリガーを引こうとすると・・・。
セイギ「まだだ。」

ゼンキ「え？」
マリア「エネルギー充填、１２０％！」
セイギ「いまだ！」
セイギの言葉と共にゼンキがトリガーを引く。
ゼンキ「ネオマキシマ砲、発射！」
次の瞬間、プロメテウスの艦首から極大な光線が射出された、その光景に、ゼンキ達は
ただ唖然としていた。
最後の武装の確認を終えたゼンキ達は、光研究所に戻り、結果の確認と、演習の映像を
見てチェックを行っていた。
ゼンキ「いや～、正直すごかったよ、いろいろとね。」
マリア「ええ、まさかこんなのがあるなんて思わなかったわ。」
セイギ「プロメテウスとプロトハイパーフリーダムは、データを得れば得るほど強くなっ
ていくんだ、これからの研究しだいでもあるがな。」
それから、ゼンキ達は実験や演習を続けながら、たくさんのデータを集めていった、その
裏で、この後に起こる悲劇の元凶が作られているのかも知らずに・・・。
第二話　完

第3話　獣の目覚め

クドウゼンキ：♂
クドウセイギ：♂
マリア・トラベリア：♀
ナレーション：♂or♀
暗黒師：♂or♀
研究員：♂or♀
ミカ：♀
???：♂or♀（ナレーションと兼ね役でもＯＫ）

エピソード3獣の目覚め

Ｎ：物語は移り変わり、とある場所から再開される
そこを表すにふさわしいのは「闇」そのもの。
ここまで闇と言うのが相応しい処が他にあるだろうか・・・。
～???（とある研究所）～
研究員「暗黒師様、あそこより新たなデータをお持ちしました。」
Ｎ：そう言い、研究員らしき男は暗黒師という名を言い放ち、その場にいたもう一人の人物に
データディスクを渡した。
暗黒師「そうか、これでまた私の研究の成就に一歩近づいたというこ
とか・・・、ふ、セイギめ、今に見ていろ、お前の研究など私の研究の足元にも及ばんのだからな。」
研究員「暗黒師様、ほかに必要なものはございますか？」
暗黒市「後はそうだな、奴の息子、ゼンキの生体データがほしい」
研究員「承知しました、では必ず。」
Ｎ：そんなことが起こってるとはつゆ知らず、光研究所では訓練の連続だった。幾度となく戦闘訓練を繰り返し、徐々に機体と艦の操縦に慣れて来た時期に新たな試みが実装された、それは・・・。
ゼンキ／マリア「実戦訓練!?」
セイギ「ああそうだ、今までは機体動作や操艦のためにドラグーンを用意したが、あれはあくまで疑似ターゲットに過ぎない、大事なの

は実戦戦闘でどれだけ扱えるかだ。」
ゼンキ「まあ、それはそうだけど、どういうことをするの？」
セイギ「俺らのデーターベースからお前の記憶上からできるだけえりすぐりの奴らを具現化する、そいつらをお前たちが倒す、そういう訓練だ。」
マリア「安全性は大丈夫なんですか？」
セイギ「安心しろ、敵のパロメーターはこっちで操作できるから、もしもの時になったらこちらで停止することもできる。」
ゼンキ「そうかそれなら良かった。」

セイギ「よぉし、じゃあ準備にかかるぞ。」
N：話が終わるとそれぞれ準備に取り掛かった、ゼンキは機体コックピットに、マリアは艦制御に、セイギは研究所内の制御室に。
セイギ「それじゃあ、特殊空間を発生させるぞ、そこにゼンキとマリアちゃんが入って、こちらから目標を出現させるからな。」
ゼンキ／マリア「了解！」
N：例のごとくプロメテウスは次元の狭間に吸い込まれるようにして消えた。
～プロメテウス艦橋（ブリッジ）～
マリア「急に実践訓練とは、さすがに驚いたわ。」
ゼンキ「確かにな、でも父さんのやることだ、きっと何か理由があるんだろう。」
マリア「もうすぐ移送空間を抜けるわよ。」
N：まばゆい光とともに新たな空間へと現出した。
ゼンキ「だだっ広いな・・・。」
マリア「そうね、何もないわ。」
N：二人の言葉のごとくそこにはただただ地平線が見えるほどに何もないところだった。
セイギ「ついたようだな、それじゃあ訓練を開始するぞ。」
ゼンキ／マリア「了解！」
プロメテウスから機体が発進される。

セイギ「それじゃあ始めるぞ、まずはコードＤＭ２」
ゼンキ「ＤＭ２？どんな奴だ？」
Ｎ：ゼンキの目の前に現れたのは二つの長い首を持つ緑色の機械の巨人だった。
ゼンキ「こいつは・・・、なるほどそういうことか。」
Ｎ：その機体の形状をゼンキはよく知っていた、そして先ほどセイギに言われたことを思い出していた。
ゼンキ「俺の記憶からってそういうことかよ。」
Ｎ：今ゼンキの目の前にいる敵機はゼンキの記憶の中にある戦闘ロボットの一機であった。
ゼンキ「あの二つの頭からはいかなるものでも溶かすレーザーが撃たれる、注意しないとな。」
セイギ「それじゃあ実戦訓練を始めるぞ。」
ゼンキ「了解。」
セイギ「戦闘開始！」
Ｎ：お互いが行動を開始する。
ゼンキＭ「これは射撃とかの訓練とは違う、実際の戦闘だ、訓練とはいえ油断するとやられる。」
Ｎ：敵機が異常なまでの速さで迫ってくる。
ゼンキ「やっぱり速い！再現度高すぎだっての！」
Ｎ：その敵機はまるで獣のごとく俊敏な動きでゼンキを追い詰めてくる。
ゼンキ「まだだ、この機体ならもっと、いや、奴よりも速く行けるはずだ！」
Ｎ：二機は斬り合いながらも徐々にその速度を速めていく。
～　光研究所観測所　～
セイギ「どうだ状況は？」
研究員「すさまじい速度になっていってます、予測値を超える勢いですよこれは。」
セイギ「やっぱりか、ゼンキが操縦するならこのくらいかと思ったが。」

研究員「いかがされます？」
セイギ「ＤＭ２程度なら撃墜できるはずだ、それまで観測を怠るなよ。」
研究員「はい。」
～　演習所　～
マリア「すごい戦いね、二機のエネルギー反応がどんどん上がっていくわ。」
Ｎ：マリアは目の前の戦闘にただただ驚愕していた。
ゼンキ「なんとか攻めに転ずる瞬間はあるが、あいつも隙がないな。」
Ｎ：一進一退の戦いをする中でゼンキは何とか決定打を打ち込む隙を探していた。
ゼンキ「そーいや俺がこの機体を設計したときこう言う状態の時のために隠し玉を入れてたんだっけな。」
Ｎ：そう言うとゼンキは機体を停止させ相手の接近を待つ体勢に入った。
ゼンキ「さあ来い、目にもの見せてやる！」
Ｎ：敵機が目前に迫る。
ゼンキ「くらえ！」
Ｎ：機体の手を開き敵機の目の前に突き出す、すると次の瞬間機体の手が眩く光り、敵機がよろめいた。
ゼンキ「上手くいったか、ここで決める！」
Ｎ：ゼンキは機体の腰のガーベラブレードを抜き一閃、敵機を両断し撃墜した。
ゼンキ「ふぃ～、なんとか上手くいったぜ。」
マリア「ゼンキ、今の光は何？」
ゼンキ「もしもの為の目くらましさ、手を一瞬だけ光らせて相手の視界を奪う物さ、まあ生き物相手にしか聞かないけどな。」
マリア「え？でも今のってどう見ても・・・。」
ゼンキ「あれは獣の習性を取り込んだ機体だからな、ああいうのには結構効くのさ。」

マリア「そうなんだ。」
N：二人は訓練を終えて研究所へと戻った。
セイギ「二人とも、どうだったかな？実戦訓練は。」
ゼンキ「正直疲れたよ、神経を張ってないとやられると思ってたよ。」
セイギ「これからは戦艦からの援護も含めて実戦訓練を強化していくつもりだ。」
ゼンキ「わかったよ。」
N：それから数日、ゼンキ達は実戦訓練を強化して訓練を続けていった、それから数日後、戦闘にも慣れてきたゼンキたちが少し強めの敵と戦闘しようとしてた時である。

セイギ「今回は少し敵の設定を強めにしてみたぞ、少しつらいかもしれないが頑張ってくれ。」
ゼンキ「わかったよ。」
N：プロメテウスの格納庫に向かうゼンキ、そこには笑顔で待つマリアの姿があった。
ゼンキ「どうしたんだよ、いつも以上ににこにこして。」
マリア「実はね、今回あなたのお父さんに頼んでちょっとしたのを用意してもらったの。」
ゼンキ「ちょっとしたもの？」
マリア「それは艦橋（ブリッジ）で見せてあげるから、早く来て。」
～プロメテウス艦橋（ブリッジ）～
ゼンキ「こ、これは・・・。」
N：プロメテウスの艦橋（ブリッジ）には新たに粒子フィールドを出力する機器が増設されていた。
ゼンキ「これは何だ？」
マリア「ほら、この戦艦（ふね）って成長型の人工知能みたいなの積んでるんでしょ？」
ゼンキ「ああ、そうだな。」
マリア「あなたのお父さんに頼んで、その人工知能に人とともしての

アバターのようなのを与えてみたの。」
ゼンキ「人としてのアバター？」
マリア「そう、学習できるならコミュニケーションをとれるようにしたほうがいいんじゃないかと思ってね。」
ゼンキ「なるほど、面白そうだな。」
マリア「それじゃあ起動させるね。」
Ｎ：マリアが機器を起動させると、そこには蒼（あお）髪のツインテールの少女がいた。
ミカ「Ｙｅｓ、システム正常、起動しました。」
ゼンキ「これは驚いた、電子生命体みたいなもんじゃないか。」
マリア「ふふ、でもね、まだこの子には名前を付けていないの。」
ゼンキ「名前？」
マリア「それでね、あなたにつけてほしいのよ。」
ゼンキ「名前を？」
マリア「そお、私じゃどうしてもいい名前が思いつかなくてねえ。」
ゼンキ「そうか・・・う～ん・・・。」
ゼンキはしばらく考えて答えた
ゼンキ「じゃあ俺の好きなバーチャルアイドルの名前を付けよう。」
マリア「バーチャルアイドル？」
ゼンキ「電子的に生み出された電子音声で歌を歌うアイドルのことさ。」
マリア「それで？どういう名前なの？」
ゼンキ「ミカにするよ。」
マリア「へえ～、いい名前ね。」
ミカ「承認、私の名前は「ミカ」アップデート完了しました。」
ゼンキ「じゃあ行こうか。」
Ｎ：いつもの如く実践演習の場に移送してくるゼンキとマリア。
マリア「今回のはどんな内容なの？」
ゼンキ「なんでもいつもより強めのやつとやるらしい。」
～　プロメテウス艦橋（ブリッジ）　～
ゼンキ「それじゃあ今日も行くか。」

Ｎ：ゼンキはいつものように機体に乗り込み発進した。
出撃したゼンキの目の前に現れたのは、細長い胴体に髑髏（どくろ）のような仮面を被った生物のような雰囲気を出してる相手だった。
ゼンキ「ん？あいつは・・・。」
セイギ「そいつはコード３「ＳＫＬ」（エス・ケー・エル）だ。」
ゼンキ「スカル・・・、確かに髑髏模様があるけど。」
Ｎ：ゼンキが機体を走らせ、敵に迫る、その時・・・。
ピィーンッ！
甲高い音とともに敵の目前で機体が停止した。
ゼンキ「なんだよこの壁は！」
～　プロメテウス艦橋（ブリッジ）　～
マリア「何・・・あの壁。」
ミカ「マスター、あれはＡＧフィールドです。」
マリア「ＡＧフィールド？」
ミカ「イエス、正式名「ＡＬＬＧＵＡＲＤフィールド」、同質かより強い性質のものでないと突破するのはほぼ不可能の絶対領域。」
マリア「そんな・・・ゼンキ、大丈夫かしら。」
～　戦場　～
Ｎ：対峙してからあらゆる武装を試したもののすべてＡＧフィールドで止められてしまう。
ゼンキ「クソ！このままじゃ一方的にやられるだけだ、何とかしないと・・・。」
Ｎ：ゼンキは敵のＡＧフィールドを止めるための決め手を考えてた。
ゼンキ「こうなったら未調整だけど、一撃にすべてを込めて撃つしかない！」
Ｎ：そう言うとゼンキは機体のシステムを立ち上げ始めた。
ゼンキ「機体セーフティーロック解除、フルモード承認、リミッター規定値まですべて解除、機体出力全面開放、Ｒドライブ全て臨界、全エネルギーを攻撃に転用。」
Ｎ：次の瞬間機体が青白く光りだし、機体のあらゆるところから噴

出したエネルギーがビームの刃へと変化していく。
ゼンキ「ハイパーフリーダム、バーストモード、起動！」
～　プロメテウス　艦橋（ブリッジ）　～
ミカ「プロトハイパーフリーダムの全リミッター解除を確認、規定外まで出力上昇。」
マリア「まさかゼンキ、バーストモードを?!」
N：バーストモード、それは機体のリミッターをすべて開放し、ただ敵を破壊するためのモード、ただし、パイロットにかかる負担をすべて無視しているため、常人がこのモードを発動すると、肉体が破裂するほどである。
マリア「無茶よ！まだあのシステムは未完成なのよ！もしうまく稼働しても肉体がついていけないわ！」
～　通信　～
マリア「ゼンキ！無茶よ！今すぐシステムを切って！」
ゼンキ「大丈夫さ！このくらいなんでもない！安心しろ、俺も、ハイパーフリーダムもこの程度じゃどうってことない！」
N：モニター越しにゼンキは笑顔で答える。
ゼンキ「頼む、俺を、プロトハイパーフリーダムを信じてくれ！」
N：ゼンキの意思を受けて、マリアは強くうなずく。
マリア「わかった。」
N：通信を終えたゼンキは今まさに敵機に突撃を仕掛けようとしてた。
ゼンキ「こりゃあ負けるわけにはいかねえな、踏ん張っていくしかない！」
N：既にプロトハイパーフリーダムは出力限界まで高まっていた。
ゼンキ「よし！それじゃ行くぞ！プロトハイパーフリーダム、フルドライヴバァーストォ！」
N：ゼンキは機体を刈り、まっすぐに敵機へ突撃していった、両者が激突する瞬間まばゆい光が放たれ、プロメテウスにいたマリアは目を覆った。
マリア「い、いったい何が！」

Ｎ：光が消え去り、ゼンキが決死の攻撃を仕掛けた「結果」がそこに現れた。
マリア「あ、あぁ・・・、そんな・・・。」
Ｎ：そこには、微動だにせずぐったりしたプロトハイパーフリーダムの頭部をつかんだＳＫＬの姿があった。
ミカ「コード３ＳＫＬ健在、損傷軽微、対してプロトハイパーフリーダム、全システム停止、パイロットの生死不明。」
マリア「生死・・・不明？そんな・・・。」
ミカ「コード３ＳＫＬ攻撃続行。」
マリア「え？」
Ｎ：プロトハイパーフリーダムの頭部をつかんだＳＫＬの手から光の槍のようなものが伸び、何度も何度も何度もその頭部を穿つ（うがつ）。
マリア「やめて・・・。」
Ｎ：マリアが悲痛に叫ぶもそれが届くはずもなく無情にプロトハイパーフリーダムの頭部は抉（えぐ）られていく
そして・・・
マリア「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
Ｎ：止めと言わんばかりに突かれた一撃は、プロトハイパーフリーダムの頭部を貫き、背後にある大岩に叩き付けられた。
マリア「そんな・・・ゼンキ・・・。」
ミカ「敵機、次はこちらをロック。」
Ｎ：ミカの言葉にマリアは、はっと我にかえる。
マリア「プロメテウス、ネオマキシマ砲用意！」
ミカ「敵機未知数、ネオマキシマ砲未調整、敵機撃墜率・・・。」
マリア「これは命令ですっ！ネオマキシマ砲用意！」
ミカ「・・・了解。」
Ｎ：マリアは涙にぬれる瞳を必死に開きネオマキシマ砲発射準備に入る。
ミカ「ネオマキシマ砲発射まで５、４、３、２、１・・・。」
マリア「ネオマキシマ砲、発射っ！」

N：プロメテウスから一筋の巨大な光線が発射される、そしてそれは敵機を飲み込もうとした・・・が。
その光線は敵機の直前で全て弾かれた。
マリア「嘘・・・。」
ミカ「敵機ＡＧフィールド展開、全て無効化されました。」
N：マリアは絶望に沈んだ、ネオマキマ砲が防がれた以上、他の武器でも
防がれることは目に見えたからだ。
マリアが絶望しようとしたその時・・・。
マリア「これじゃ・・・なにも・・・。」
ミカ「・・・システム起動を確認。」
マリア「え?ミカ、いまなんて。」
ミカ「プロトハイパーフリーダムシステム起動を確認」
N：マリアが戦場を見てみると、先ほどまで倒れていたプロトハイパーフリーダムが起き上がっていた。
マリア「ゼンキ！無事なの!?ゼンキ!?」
N：返答はない、ただ、プロトハイパーフリーダムが動いているのは紛れもない事実だった。
そして・・・。
???「ぐぅおおおおおおおおおおおお！」
N：咆えた（ほえた）、今確かにプロトハイパーフリーダムは天に向かって激しく吠えた。
マリア「なに・・・あれ」
ミカ「不明、私のデータにも該当するものはありません。」
???「ぐぅううううううううううううう」
N：プロトハイパーフリーダムは唸り（うなり）ながら敵機へ猛スピードで突進する。
しかし
ミカ「敵機、ＡＧフィールド展開。」
マリア「無茶よ、ネオマキシマ砲ですら貫けなかったのに・・・。」
N：その時だった。

ミカ「プロトハイパーフリーダムも同種のバリア展開、相手のＡＧフィールドを同化、侵食していきます。」

Ｎ：そしてプロトハイパーフリーダムは相手のＡＧフィールドを紙のように引き裂いた。

マリア「あのＡＧフィールドをいとも簡単に・・・。」

Ｎ：プロトハイパーフリーダムが相手を殴り、蹴り、その腕を引きちぎる、その様はまるで捕食者と被捕食者、そして・・・。

???「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおお」

Ｎ：プロトハイパーフリーダムが口を開き相手に食らい付く、そう、敵を食っているのである。

完全に破壊された後にはプロトハイパーフリーダムが静かにたたずんでいた。

マリア「プロトハイパーフリーダムを回収！光研究所へ帰投します。」

ミカ「了解」

Ｎ：そうしてマリアたちは光研究所へ帰投していった・・・。

第三話　完